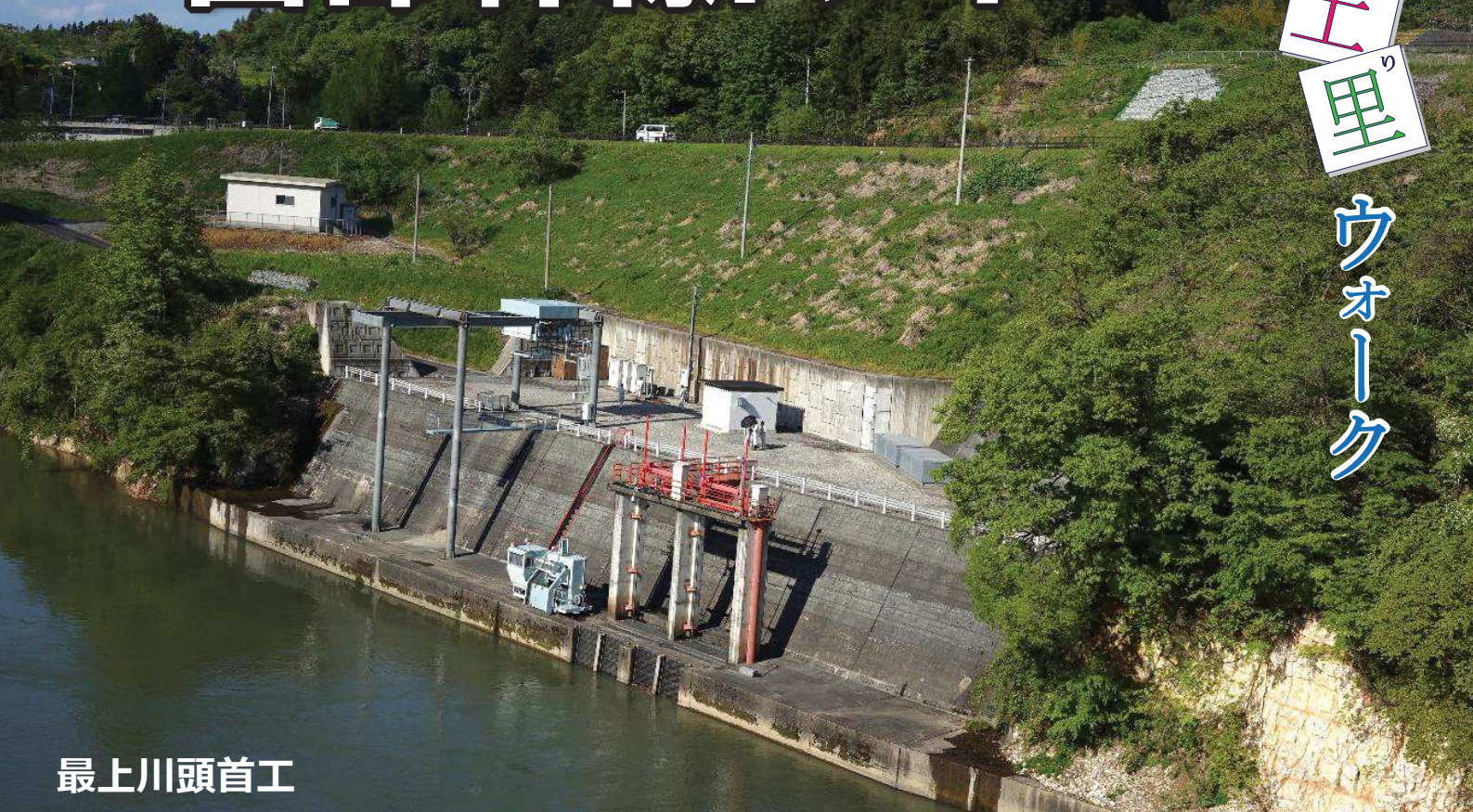


西部幹線トンネル

水^み
土^ど
里^り
ウ
オ
ー
ク



最上川頭首工

何としても農業用水を確保しなければ・

山形盆地の西側は、かつて農業用の水源が乏しく水不足の常習地帯であった。これは、盆地の中央を流れる須川が強酸性のため稲作に使用できず、流量の少ない小河川やため池に頼っていたからである。

このため、明治時代の頃から最上川の水を導水できないものかとの検討が進められ、各方面に要請活動が行われてきた。その後、昭和33年の大干ばつを契機に、導水計画の実現に向けた機運が高まり、昭和49年に国営の水利事業が採択されている。

この工事は難工事で、2度のガス爆発事故が起きながらも、昭和56年に最上川と山形盆地を結ぶ西部幹線トンネルが完成した。

壮大なスケールを誇るトンネル

山形市内ほか約3,600haの農地を潤す水は、朝日町の最上川頭首工から取水し、山辺町の出口までの、約9.4kmもの延長を誇るトンネルである。トンネル入口の頭首工と、出口の高低差は約3.6mで、2.6kmで1m差とほぼ平坦である。

トンネルの管理

現在は、ガス濃度警報計等の機械の点検に加え、毎年トンネル内を3時間程歩き、内部の状態や土砂の堆積状況を点検している。また、最上川中流土地改良区内の集中管理センターにおいて、24時間体制で頭首工の確認や、取水量が管理されている。

事故犠牲者への敬意

昭和51年5月と昭和53年6月の2度のガス爆発事故で18名が犠牲者となった。これを偲びトンネルのほぼ直上で山形盆地を見渡せる場所に慰霊碑が建立された。



集中管理センターでの監視



慰霊碑

西部幹線トンネルマップ



トンネル踏査時の点検状況



①

～取水ゲートの点検～

朝日町の最上川頭首工にあるゲートの点検。



②

～トンネル内の点検～

約 9.4km のトンネル内部を歩き点検。



③

～出口～

①から徒歩3時間、山辺町の出口へ。